



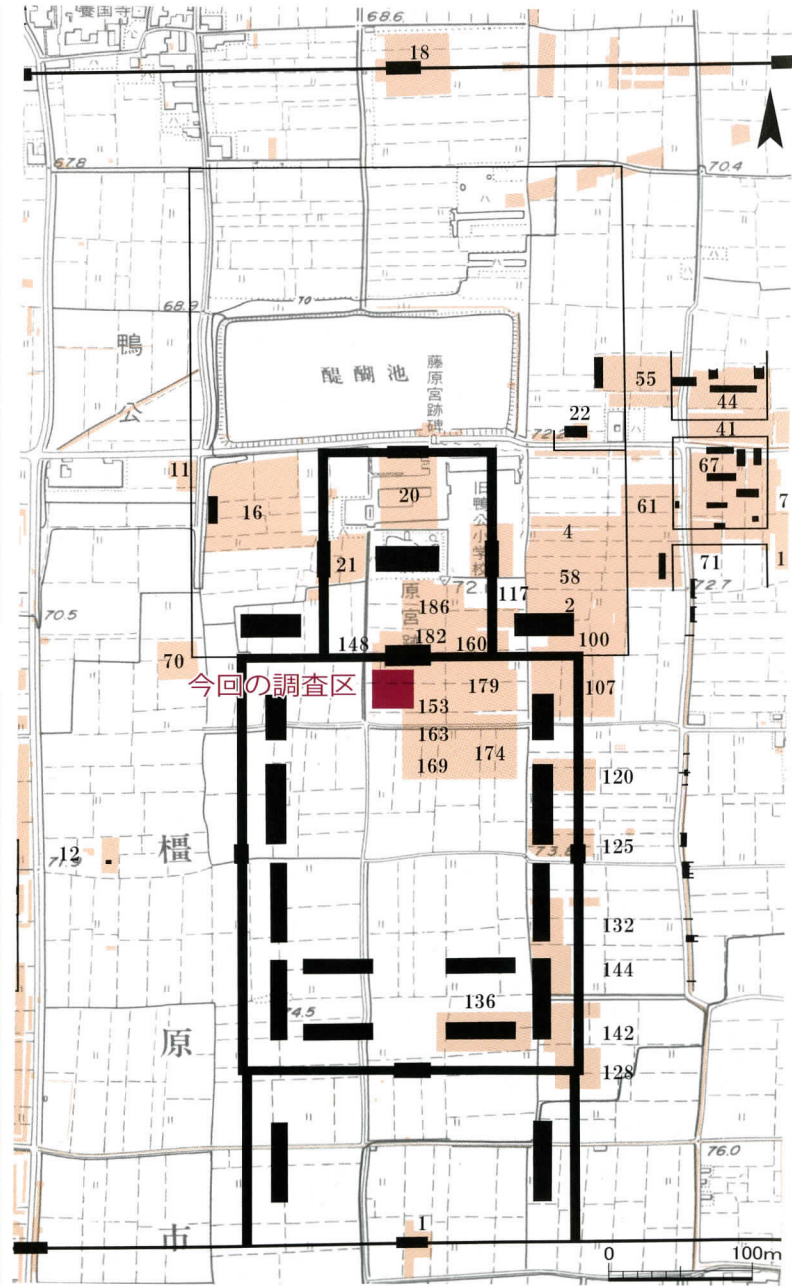
藤原宮期 礎敷面検出状況（南東から）  
※写真右上に大極殿院南門の遺構表示と大極殿、耳成山が見える



藤原宮期 礎敷面細部  
※様々な大きさの礫と灰色砂を敷きつめている



柱穴C断面（西から）



調査位置図  
※第153次調査の西、第148次調査の南に位置する



柱穴1～9検出状況 左：（東から） 右（西から）  
※柱穴部分の礎敷面が盛り上がり、柱穴の柱抜取穴に礫が入る

# 藤原宮 朝堂院朝庭の調査

飛鳥藤原第189次調査 現地説明会資料  
(独) 国立文化財機構奈良文化財研究所 都城発掘調査部



発掘調査区全景（南から）  
2016年8月26日撮影

大極殿院南門の南側、朝堂院朝庭の北端部を調査し、朝堂院朝庭北端部における儀式の様相解明を目指しました。藤原宮期の遺構として、礫敷広場や大型柱穴群（柱穴A～D）、柱穴列（柱穴1～9）などを検出しました。

特記すべき遺構としては、大極殿院南門の南側で検出した大型柱穴群と、調査区南端で検出した柱穴列があり、いずれも儀式などに関連する旗竿遺構と考えられます。とりわけ、中央の1基を挟んで東西に3基ずつ対称に配置された計7基からなる大型柱穴群は、大宝元年（701）の元日朝賀の際に正門に立てられた7本の幢幡（鳥形幢、東に日像、青龍・朱雀幡、西に月像、玄武・白虎幡）に関わる遺構である可能性が高いと考えられます。

### 宮中軸上に1基、東西に各3基が対称に並ぶ、7基からなる大型柱穴群（柱穴A～G）（藤原宮期）

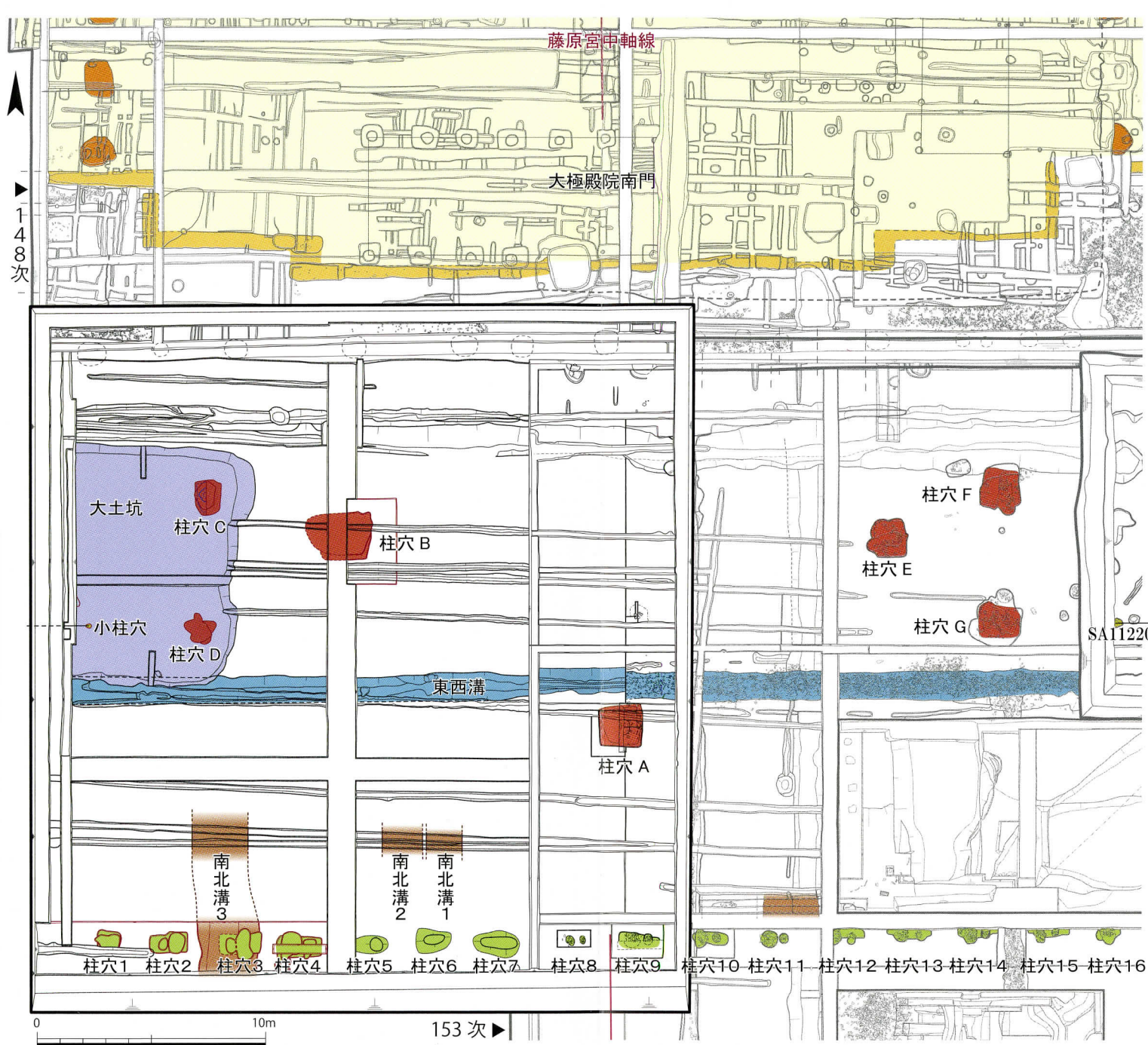
調査区西北部で、三角形の配置をなす3基の大型柱穴（柱穴B～D）を新たに検出しました。これらの大型柱穴は、第153次調査で検出した三角形の配置をなす大型柱穴（柱穴E～G）と藤原宮中軸を挟んで、ほぼ東西に対称の位置にあります。さらに、第153次調査では宮中軸線上に単独で存在する柱穴Aを検出しています。これら7基の大型柱穴は、藤原宮中軸に関して対称な配置をなしていることや、柱穴の規模および構造が類似することから、一連のものとして理解することができます。

これら7基の大型柱穴はその配置関係や構造から儀式に関わる旗竿遺構と考えられます。さらに、大極殿院南門のすぐ南にあるという位置も注目されます。『続日本紀』には、大宝元年（701）の元日朝賀に際して正門（大極殿院南門）に鳥形・日像・月像・四神という7本の幢幡を立てた、と記されています。これは、7本の幢幡を立てたという文献上の記録の初出です。この元日朝賀の様子は、「文物の儀、是に備れり」と語られた古代史上の象徴的な出来事です。

これまでの調査では、大極殿院内庭を含めて他に候補となる遺構を検出していないことも踏まえると、これら7基からなる大型柱穴群が、『続日本紀』に記された7本の幢幡に関わる遺構として、最も有力な候補といえます。

### 小柱穴（藤原宮期）

調査区西端中央で径0.2mの小柱穴を検出しました。この小柱穴は、第179次調査で検出した東西柱穴列SA11220の西端の柱穴と藤原宮中軸を挟み対称の位置にあります。このことから、宮中軸を挟んでSA11220と対称の位置に、西に延びる東西柱穴列が存在し、小柱穴はその東端にあたるものではないかと考えられます。



飛鳥藤原第189次遺構平面図

柱穴Aに鳥形幢、柱穴Bに月像、柱穴Cに玄武幡、柱穴Dに白虎幡、柱穴Eに日像、柱穴Fに青龍幡、柱穴Gに朱雀幡が立っていたと考えられます



柱穴A～D検出状況（南から）  
※右が柱穴A、中央が柱穴B、左上が柱穴C、左下が柱穴D



復元幢幡7本を立てていたと考えられる場所付近に配置（南から）  
※中央に鳥形幢、その東西に日・月像、四神幡を配す

### 宮中軸を挟んで東西対称に8基、計16基で構成される柱穴列（柱穴1～16）（藤原宮期）

調査区南端で東西に並ぶ柱穴列を検出しました。柱穴に対応する部分の礫敷面は盛り上がり、大ぶりの礫が目立ちます。第153次調査で検出した柱穴列（柱穴8～16）の西延長部分にあたり、柱穴1～7の7基を、今回新たに検出しました。その結果、藤原宮中軸を挟んで東西対称に8基ずつ、計16基で構成されることが判明しました。これらの柱穴は、横長の柱掘方の中に2本の柱を立てるものを基本とし、両端の柱穴のみ1基の柱掘方に1本の柱を立てる構造であることもわかりました。

### 礫敷広場（藤原宮期）

朝堂院朝庭は、儀式の際に役人が整列する広場です。この広場に施された礫敷を、調査区全域で検出しました。礫敷面は良く残っており、径3cmから拳大のものを中心とした様々な大きさの礫と灰色砂を敷き詰めていることがわかります。

### 東西溝（藤原宮期）

調査区中央付近を東西に走ります。礫敷広場と一体的に礫で埋め立てられています。東西溝周辺は広場で最も低い部分で、礫詰暗渠として機能したものと考えられます。

### 南北溝1～3（藤原宮造営期）

礫敷面の下で、3本の南北溝を部分的に検出しました（南北溝1～3）。いずれも藤原宮造営期の遺構とみられ、溝に対応する部分の礫敷が凹んでいます。これらのうち、南北溝2は先行朱雀大路の西側溝と考えられます。

### 大土坑（藤原宮廃絶後）

調査区西北部で大土坑を検出しました。礫敷広場を掘り込んでいます。出土遺物から平安時代以降のものと考えられます。



復元幢幡を今回の調査区に配置（南東から）  
※右端が鳥形幢、中央が月像、左奥が玄武幡、左端が白虎幡